

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel・fax: 042-540-1663 (事務局)

tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

E-mail: simin-siryu@nifty.com

www.c-archive.jp

◆正会員 1口 6000円、賛助会員 1口 3000円

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ

アーカイブ 通信 No.4

2015年度 始動!

—「活用」をキーワードに—

会員募集中

5月24日(日)に2015年度総会と、開館1周年を記念した講演会を開催しました。

昨年度は1年目ということもあり、「市民アーカイブ多摩」を月6〜7回開館するので精いっぱいでしたが、

2年目になる今年は、資料の「活用」を一つのキーワードにしながら、組織基盤の強化と

ともに、学習・研究活動、広報・普及活動、他機関・団体との連携の模索等、積極的にやっていきたいと思っています。

◆**会員として支えてください**

私たち市民による市民のための市民アーカイブには、多くの方の支えと知恵

が必要です。ぜひ会員として、継続的に当会を支援していただきたく、よろしくお願ひします。会員の皆様には、会員名簿や総会議案書・記録等を、別途お送りします。

◆**寄託から寄贈へ**

当会が保存活動をしている資料の一部である2002年以前収集の「市民活動サービスクーナー資料群」は、2012年5月から法政大学大原社会問題研究

所環境アーカイブズに資料を寄託し、協働で資料整理を行ってききました。

この間、相互の信頼関係も厚くなり、逐次刊行物(ミニコミ)については入力作業も終わり、全面公開が始まりました。同大学からの申し出により、寄託から寄贈に契約を変更する文書を交わしました。ぜひ法政大学にも足を運んでください。

今年度も一緒に、どうぞよろしくお願ひします。皆様からのご意見、アドバイス、お待ちしております。

開館1周年記念講演報告

市民アーカイブを活用する!

—立教大学共生社会研究センターの歩みから—

高木恒一さん

立教大学共生社会研究センター長



ネットワーク・市民アーカイブもスタートして1年。活動を進めていく上で、新しい課題が次々と浮かび上がってきています。市民活動資料の収集・公開の実績があり、資料も充実している立教大学共生社会研究センター長の高木恒一さんに、ご経験をふまえた市民アーカイブの活用について、

お話を伺いました。

◆**二つの源流**

立教大学共生社会研究センターには二つの源流があります。一つは、1976年に設立され、2001年まで民間施設として活動を続けた住民図書館です。運動系のミニコミの保存・整理・公開や、住

民運動資料の収集・保管を続けてきました。

もう一つの源流は、埼玉大学共生社会研究センターです。1997年に経済学部社会動態資料センターとして設立され、PARC(アジア太平洋資料センター)所蔵の東南アジアを中心とした海外の住民・市民運動資料受け入れて

いたほか、ベ平連(ベトナムに平和を!)市民連合や練馬母親連絡会などの住民運動資料、宇井純氏公害問題コレクション、さらには鶴見良行氏の資料などを保存・整理・公開していました。

◆**住民図書館—埼玉大—立教大**

住民図書館の全資料は、2001年に埼玉大学共生社会研究センターに移管されました。そして2009年、埼玉大学は資料の一層の活用のために、所蔵資料を立教大学に移管することを決断し、立教大学と埼玉大学は同年に覚書を締結し

ました。1年の準備期間を経て2010年4月に立教大学共生社会研究センターが発足し、同年9月より資料の公開を開始しました。

ただし、当初は施設が暫定的なものであったため受け入れた資料は住民図書館とPARCの資料のみでした。その後2012年には全資料の移管を受けましたが、施設問題が解決しなかったために多くの資料を未公開の状態にせざるを得ない状況が続いています。2015年4月によく施設の移転にこぎつけ、この結果全資料の公開ができる体制が整ったところです。

現在の所蔵資料の概要は、住民図書館が収集したミニコミ、PARCからの移管資料が約25万点、市民・住民運動資料が約20群、さらに宇井純氏の公害問題コレクションや鶴見良行氏の研究資料などの資料も所蔵しています。

◆引き継いだ思いと志

立教大学が受け継いだのは資料だけではありません。住民図書館、埼玉大学の思いや志もまた受け継いでいます。例えば丸山尚さんは「人が人らしく生きられる暮らしをす

るには、それまでの社会を変える必要があったからだ。住民図書館の活動は、そうした運動や活動の資料・情報面にシフトしたことによって、より人間らしい世の中に変えたい、という人々とその思いにつながれたのだと思う」と述べています。同時に、住民図書館の資料を埼玉大学に移管することについて「私たちの集めた資料がアカデミズムのど真ん中に位置するようになったことで、研究資料としての価値もいちだんと上がったと思う。そしてまた、アカデミズム自身が、従来の〈学問・研究〉の枠から脱皮し、市民の科学の立場をより重視し、市民が政・官・業の一角に地歩を築く力となる日が、一日も早くくることを願ってやまない」と述べ、大学への移管を積極的に捉えようとしていました。

一方、資料を引き継いだ埼玉大学共生社会センター長の上井喜彦さんは、センターの目指す方向を「市民に開かれ、市民に支えられるセンター」と述べています。私たちは、これらの思いを引き継ぎつつ、資料の収集・整理、研究支援、情報発信などの活動を続けていきます。

◆情報提供、出版企画協力、公開講演会、授業

資料の受け入れについては、ミニコミを現在、約450タイトルを継続して受け入れています。このなかで、東日本大震災・福島第一原発事故以降の震災・原発災害関連の記事をデータベース化してきました。このデータベースは国会図書館と連携しています。また、住民・市民運動資料の受け入れも行っています。ただし、これはスペースなどの問題があり、すべての依頼には対応できていません。対応できない場合には他機関の紹介などを行っています。

一方、情報の発信については、マスコミや博物館などへの情報・資料提供、出版企画への協力、公開講演会などを行ってきました。また、大学の部局という位置付けから、2012年度以降、半期1コマの授業を毎年展開しています。

◆アーカイブを基に書籍刊行

では、こうしたアーカイブの今日的意義はどこにあるのでしょうか。センターは大学に置かれたアーカイブであることから学術的な成果が求めら

れます。幸いなことに、この分野では大きな成果が生まれています。2014年度には2冊の博士論文を基にした優れた書籍が刊行されました。このほかにも学術論文で利用されることも増えていますし、修士論文・卒業論文・学部生のゼミ論文などでも利用実績が積み重ねられています。しかし、こうした大学ないしはアカデミズムの世界に閉じた成果は、センターの意義を十分に示すものではありません。

◆市民の〈知〉の蓄積の場

私はセンター長就任1年を経た時点で、「歴史を生み出す」という観点からは時間を繋ぐこと、出会いを生み出すという観点からは人を繋ぐということ、この二つの「繋ぐ」ことがセンターの使命と「至った」と書きました。これに加えて、現在重要だと考えているのは市民の知の蓄積の場であるという事です。センターに蓄積されているのは、市民の活動の記録であるとともに、市民自ら生み出し、問題を提起するための知でもあります。この知はアカデミズムや政府が生み出すものとは異なるものであ

り、こうした知を持つことが社会を豊かなものにします。こうした市民の知の蓄積の場としての意義を強く意識しています。

◆オーラを発する資料たち

では今、市民アーカイブがなすべきことは何なのでしようか。第一には、原発問題、平和問題、沖縄問題など市民・住民活動が積み重ねてきた到達点が脅かされている今日、改めて市民が取り組んできたものを確認することが(不幸にも)必要になっていきます。そうした原点の確認のために、センターの意義は大きくなっていきます。

しかし第二に、そしてより重要なことは、今日の危機を生み出している社会状況——例えばそれは、反知性主義と呼ぶこともできます——に対して声を上げることです。市民の知の蓄積を通して、社会には多様な知が存在し、これらを付き合わせるこの重要性を提起することが重要だと考えています。そして、こうした市民活動の蓄積を、若年層に伝えることが必要です。大学に置かれたセンターは、授業という形でこれを伝えていきます。この動きを

拡大することが必要だと感じています。

ただしここで伝えるべきことは、「危機に対抗して頑張れ」というようなことだけではないように思います。資料に触れていていつも思うのは、活動のもつワクワク感や面白さともいえるべきものです。当事者の方には怒られるかもしれませんが、活動の苦しみや困難を知ったうえで、なおそのうえに思いにあふれ、喜びや高揚感に満ちていることを感じずにはいられないのです。センターの書庫に並ぶ資料は、活動のみならず様々な思いを伝えようというオーラを発していると思えます。

市民の活動の持つ意義と、このなかで生み出される思い。こうしたことを、資料を通して若い人たちに伝えていくことこそが、大切なことではないかと考えています。

【注】

- (1)丸山尚、2001年、「住民図書館は、なぜ25年生き延びられたか」住民図書館編『住民図書館25年のあゆみ』ミニコミを収集・公開・保存して』122p
- (2)同125-126p
- (3)上井喜彦、2001年「住民図書館の25年と大学の役割」前掲書：170p
- (4)高木恒一、2011年、「歩みはじめた立教大学共生社会研究センター」時間を繋ぐ、人を繋ぐ立教大学共生社会研究センターニューズレター「PRISM」1号

◆質疑応答

Q 組織の規模、利用状況は？
高木 常勤2名、RA(リサーチャーアシスタント)2名(大学院生) 4人が活動し、年間300人ほどの利用があります。

Q 学生に対して、ミニコミに関する授業を行っているとのことですが、学生たちの反応はどうですか？
高木 300人くらいの学生が受講していますが、その多くがアーカイブやミニコミのことを知らない学生たちです。ごく少数ながら講義をきつかけに興味をもってくれる学生もいます。

Q デジタル化への対策などは考えていますか？
高木 公開できるかどうかという著作権の問題と何年先まで残るかわからないデジタルデータの保存の問題をどうするかを考えなければなりません。保管場所の問題はあるのですが、紙の記録の方が何百年も残るといふ事実もあります。

Q 収集方針はどうなっていますか？
高木 重要性、重複など勘案しながら、最終的には資料をみて判断します。資料全体の量で判断することもあります。



Q 継続して受け入れている逐次刊行物としてのミニコミは減ってきていますか？
高木 タイトル数は減ってきていますが、ミニコミ全体としての総数はわかりません。

Q 高木さんご自身はどのような資料が面白いと感じますか？
高木 専門が都市社会学などで、住宅地、団地の問題などが書かれた資料は興味深く読んでいます。

Q どのような資料が集まっているのでしょうか？
高木 積極的に「資料を集めています」という広報はしていません。口コミで当センターのことを知った人から送られてくるものを受け入れています。内容や地域的な偏りはあるかもしれませんが。

Q 五味正彦さんの資料で引き取れなかったものはどんな資料ですか？
高木 重複しているものは受け入れませんでした。ただ、何を処分したのかという記録は残っています。

Q 資料はいつ、どこで役につかわからないものですが、誰のために残しておくことを目的としますか？
高木 現状としては、目の前の資料を悩みながら捨てたり残したりしていくような感じですね。

Q 今後の立教大学共生社会研究センターの展望は？
高木 センター長としてではなくユーザーとして関わりたいのですが(笑)、そうもいきません。資料をただ預かるだけでなく、全国各地のアーカイブのコアとなるような役割を担ったり、人材を短期研修などの形で養成できる場所となったり、私たちがそのパイオニアになればと思います。

Q 当会へのアドバイスをお願いします。
高木 資料をどうするかの前にも、どうやって生き残っていくかが大事だと思います。予算も人材も現状は厳しいですが、他のアーカイブと連携しながら、その処世術を学んでいく必要があるかと思っています。アドバイスというより、こちらからも今後ともよろしくお願いします。

◆感想から(一部抜粋)

- ・立教大学の具体的な取り組みや考え方を知ることができ、大変勉強になりました。
- ・住民図書館と埼玉大のニュースの差に関する話は面白かった。アカデミズムと実践の関係は難しい問題だと改めて感じた。
- ・ミニコミ紙、住民運動資料を残していく大切さがよく分かって良かった。ネット社会において、いかにしてアナログ資料をアーカイブ化していくかが大切だと思う。
- ・個人的なお話も含め、興味深いお話でした。こういう話は、ぜひミニコミの「原本」(コピーでも良い)を使いたいがらだどより分かりやすいと思います。

「アーカイブとは何か？」 ——アーキビストからの提言——

中村 修(藤沢市文書館)

市民アーカイブ多摩では、クヌギ、コナラ、山桜などの木々が生い茂る会場の魅力を活かして、4月より「緑蔭トーク」という新たな試みを始めました。隔月でネットワーク・市民アーカイブの関係者やゲストが、自然に囲まれたくつろいだ雰囲気のおかげで幅広い話題を提供していきます。
第1回は4月25日に開催しま

者15人。
(報告＝増沢航)

◆紀元前2000年から

長大な「アーカイブ」の歴史を簡潔にたどっていくと、世界で初めてのアーカイブは紀元前2000年にメソポタミア・ウガリト王宮で確認されている「年度記録保存庫」といわれ

ています。欧米ではアーカイブの社会的権威が高く、国民や市民の権利を保障する(あるいは市民や国民がそれぞれの義務を確認する)場としての歴史をたどってきたことが示されています。

◆日本では8世紀以降

一方、日本でのアーカイブのルーツとしては、8世紀初頭から飛鳥・奈良時代の戸籍などの情報を記録してきた「正倉院文書」があり、以降寺社などがその役割を担ってきました。近代になると図書館や博物

館がアーカイブとしての機能を担うのですが、たとえば行政文書に目が及ばないことや公開が二の次となっているなどの難点があります。アーカイブに対する意識が希薄であることも影響しているのでしょうか、太平洋戦争敗戦時には、軍を中心として大量の公文書が焼却されてしまいました。

◆遅い・小さい公文書館

戦後、歴史学会などを中心に「史料館」設置を求める動きが相次ぎ、1959年に日本初のアーカイブ、山口県文書館が開館します。ちょうどこの頃は昭和の大合併を引き金として

起こった大量の地方自治体公文書の廃棄に対して、公文書の散逸を防ぐ動きも活発化していました。1971年には国立公文書館が開館し、1987年によりやく「公文書館法」が制定されます。ただ、各国の国立公文書館の沿革・規模と比較すると、日本は国家の公文書館や公文書館法ができたのが遅いだけでなく、何より公文書館の規模が圧倒的に小さい現状がみとれます。

◆開かれた社会のために

こうしたアーカイブの歴史をふまえて、そもそもアーカイブは何のために必要なのかを考察していきます。そこで取り上げたのは、開かれた社会という視点。アーカイブはこの開かれた社会を維持し、継承していくための機関としてあるべきであり、そのための活動を担っていくことが求められているのです。

その後、意見交換、質疑が設けられ、市民アーカイブという概念とはそもそもどのようなものなのか？ オールヒストリーとアーカイブはどのような関係にあればよいのか？ 各国のアーカイブ教育の現状はどのようなものか？ といった参加者同士による活発な意見交換がな

私と活動2 市民資料

巡りめぐって 湯瀬秀行

□部室の奥の歴史的資料

私が初めて「市民活動資料」に触れたのは、大学4年の卒論の資料探しに、当時目黒にあった住民図書館を訪れたときだ。もう30年余り前のことになる。そこから住民図書館の資料保存の活動に参加をしていったのだが、そもそも資料保存や住民図書館に関心をもったのは、大学でのサークル活動からだった。

大学時代、私は障害者関係のボランティアサークルに所属していた。そこは身体障害者の施設訪問、聴覚障害者(学生)のための手話(通訳)、地域の障害児のための子供会活動と対象が複合的な会だった。メンバーはそのうちの二つに所属しているが、他のところで人手が足りない場合などには応援に行くことがよくあり、そのうちこの所属か曖昧な状況になってしまった。そんな中で学生サークルにはよくある話で、分裂騒動がも

ちあがった。この騒動でドタバタしている間に、部室の奥の方の埃にまみれた暗闇の中に、はるか昔の連絡ノートや機関紙などサークルの歴史を物語る資料が眠っているのを発見した。読んでみるとこれが面白い！ 歴史は繰り返すではないが、先輩

□クラスで飛び交う新聞

もう一方で、私と「ミニコミ」との関わりのルーツをたどると、さらに10年ほど遡る小学4年生のときになる。今もあるのかどうかわからないが、私たちの頃はどこのクラスにも学級新聞なるものがあり、係を決めて作っていたものだ。ところが私



のクラスの担任の先生は、ガリ版をクラス生徒全員に開放し、だれでも自由に新聞を作ることができるようにした。一時は20あまりの新聞がクラスの中に飛び交った。今にして思えば、これが私の「ミニコミ」原体験といえる。このときに「新聞」づくりに嵌まった友人とともに後に成人してから2人してミニコミ



市民活動は「平和に」「穏やかに」「楽しく生きたい」という願いを実現するための営みであると言えるでしょう。その願いを根本のところで保障しているのは「日本国憲法」ですが、憲法の理念が実現されていない、変えようとする動きが大きくなっていく中で、憲法をテーマとするミニコミ(以下、憲法ミニコミ)は数多く発行されていると思われま

当館で所蔵できているのはそのごく一部に過ぎませんが、それでも、憲法ミニコミ15タイ

市民アーカイブ多摩の資料棚から② 〈憲法〉

を作ったこともある。余談ながら、彼が長じてミニコミを始めたきっかけが、なんと市民活動サービスコーナー発行の冊子『市民活動』の多摩のミニコミ特集を図書館で見たことだった。何という奇遇！

大学卒業後は一般企業に就職し、時々の休日に住民図書館に手伝いに行っていた。ところ

◇東京・多摩地域で発行

トルあり、資料室では、分類番号13〔法律・司法〕に配架されています。分類番号13のミニコミは全部で21タイトルなので、ほとんどが憲法ミニコミということになります。

憲法ミニコミのうち所蔵号数が最も多いのは、立川市で長年発行されている『市民のひろば・憲法の会ニュース』。会が主催する毎年5月の憲法集会や学習会に向けての活動状況の報告や呼びかけなどが主な内容。また集会の『記録集』を夏に別途発行しています。『立川九条の会ニュース』は、学習会報告を中心に署名の進行状況、抗議文、例会(学習会)案内などを掲載。第32号(14年6月)のメイン記事は学習会報告「伊達判決の今日的意義」と「NHK問題を考える」。

『調布「憲法ひろば」』は学習会の報告と例会や催しの案内を掲載。第118号は定例会の講演「『第99回憲法ひろば』戦後70年

が、住民図書館が助成金を受けてミニコミデータベースを作成することになり、それを機に私は会社を辞め、専従スタッフとなり、巡りめぐって今日、市民アーカイブ多摩に関わっている次第。

(ゆげ・ひでゆき 当会運営委員、助成財団センター)

とアジアの平和」が報告されています。

多摩地域で発行されている憲法ミニコミは他に、『むさしの憲法市民フォーラム通信』、『多摩市民九条の会』、『九条の会・国立北ニュース』があり、それぞれ活動の報告や呼びかけなどを掲載しています。

◇関西からの憲法ミニコミも

東京圏では他に『平和に向かってー九条の会・さいたま』、『市民アピール版』を所蔵。遠く関西で発行されている、『小さい九条の会会報』(奈良)、『第九条の会ヒロシマ』もあります。『小さい九条』はB5判4頁の表紙に平和を求める子ども絵を、本文で会の「くるま座トーク」の報告や呼びかけを掲載。『ヒロシマ』の83号(14年9月)は、4つの集会の参加呼びかけ、原稿(教科書に領土問題はどうか記述されたか、他)、8月の新

されました。初回ということもあり、手探りのイベントではありましたが、私たちの活動の基本でもあるアーカイブについて、理解を深めることができただのではないかと思います。

◆これからの緑蔭トーク

◇第3回 8月22日(土)

「ウルグアイのメモリアム」

ミュージアム」
荒井容子(当会運営委員、法政大学社会学部教授)

◇第4回 10月24日(土)

「3・11震災からの資料レスキューについて」

青木 睦さん(国文学研究資料館)

・時間 16:15~18:00

・場所 市民アーカイブ多摩

聞意見広告特集などの記事をA4判20頁にぎっしりと掲載しています。

特定の地域に関わりなく発行されている、『私と憲法』(許すな!憲法改悪・市民連絡会)、『国連・憲法問題研究会連続講座報告』、『世界へ 未来へ 9条連ニュース』、『いろはにこんべいとう まなびの草紙 憲法編』(しずく工房)も所蔵しています。

『私と憲法』166号(15年2月)は全国交流集会報告、市民講座の記録、行動への呼びかけなどをA4判20頁にじっくりと掲載。『国連・憲法』は他に「資料集」と機関誌「PEACEBERY JAM」(分類番号20)のファイルもあります。『世界へ未来へ』245号(15年5月)は1頁の詩に続けて、『一強驕る安倍政権の報道抑圧』他の原稿、連載コラム、映画評、本の紹介、会からの呼びかけや集会案内、各地の報告、お便り、川柳、1コ

マ漫画など盛り沢山です。『いろはに』は視野の広がる学習テキストです。

◇もっともっと増やしたい

この欄では一部のミニコミについて、また外面的な紹介しかできないのが残念です。

実際のミニコミを手にとるとそれだけで、発行者の熱い思いや限られた紙面で、会の活動や得られた情報を広く知ってもらいたいと奮闘している様子が伝わってきます。

以上紹介したのは、一定量(原則3号)以上の所蔵があり、現在当館でファイルを作成したミニコミです(欠号あり)。当館にはこれら以外にもまだファイルが作れない憲法ミニコミがあります。そしてまだ私たちの知らない憲法ミニコミがたくさん発行されているはず。憲法関係のミニコミを発行していたり、ご存知の方はぜひご連絡ください。(山家利子)

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩で所蔵する団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を発行者の方に紹介していただきます。

グループ目高舎通信

「グループ目高舎」という一風変わった名前の市民活動団体が武蔵村山というトーキョーの辺境で活動しています。名前の由来は、同じ地域に住むメダカのように弱い立場の者たちが、学びあい教えあう、だれが生徒か先生かよく分からない、場合によってはだれもが生徒でもあり先生でもあるメダカの学校という意味のネーミングです。

武蔵村山という地域は狭山丘陵の南麓、東京都側に位置し、交通不便のため、なにごとも中途半端な街ですが、逆にそれを活かして

- ・創刊1987年、500部、B4判、モノクロ、週刊で発行/左は年2回発行の目高舎文集
- ・問合せ: tel・fax:042-561-9952
- ・当資料館所蔵: 377-893号(一部欠号有) それ以前の号は法政大学環境アーカイブズ所蔵



ミニコミも同時に始まっていて、すでに900号を超えています。発行部数は最大9000部の時もありましたが、現在は500部ほどで落ち着いています。これには前身がいろいろありました。その一つが「アイサツ代り通信」(愛称アイ通信)というミニコミを出し続けていたことにあります。実は筆者は70年代

戦争と性

創刊号(97年)は自分の思いを綴る「個人通信」として出発しましたが、今では他の人の原稿やインタビュ、座談会などを入れて雑誌形式で発行しています。読者は日本軍「慰安婦」問題や性暴力に関心のある方々が中心で、とりわけ男である私が男性の性的加害性に焦点を当てていることに注目していただいているようです。

私が『戦争と性』を発行する一番の「原点」は、自分が戦時中に生まれていたら、父や祖父の世代の男たちと同じように「慰安所」の前に並んでいただろうという、ほとんど「確信」に近い思

半ばから夫婦で巨木巡りを趣味としていて、その過程で80年からアイ通信を出し始めたのです。年賀状のような虚礼はやめ、メッセージを込めたものを挨拶代わりに出そうと思ったのです。無駄はやめ節約をするというエコロジーとエコノミーに合う在り方です。こちらは36年目です。長らく並行して出していました。いろいろなあつて今はアイ通信は目高舎通信の一面にコラム的に存在しています。(林喜代三)▽内容: 催し案内、リサイクル斡旋、スポット産直、連載「市民運動をつなぐコーナー」/「本の人と樹の話」「目高の学び舎」(アイ通信)/目高舎文集は投稿誌、エッセイ、詩、読書日記、自分史、川柳等。

いからです。「確信」と言うとき女性の皆さんは驚くかもしれませんが、多くの男たちの性の実態はそんなところをうろろろしているというのが私の実感です。橋下大阪市長の「慰安婦制度は必要なのは誰だってわかる」という発言が、一定程度賛同を得てしまっているのも、そのような男性の現実があるからです。

しかし、その現実を「よし」とするの、それともそれを「変えていこう」とするのか、そこに重大な分かれ目があります。戦時中の公娼制度、「慰安婦」制度、戦後のアジア各地への買春ツアー、そして、最近の女子高生をターゲットにした「JKビジネス」。私はこのような日本の男たちの性の歴史を、自分自身の性のある方も含めて変えていきたいのです。

橋下氏のような発言は数限りなくされてきましたが、私が最も罪深いと思っているのは、安倍首相の「官憲が家に押し入って人さらいのごとく連れていく」という、そういう強制性はなかった」という国会での発言です。これは、強かん裁判で加害者が「同意があった」と言っているの犯罪行為を正当化すること

と同じです。「慰安婦」にされた女性たちに対するセカンドレイプ、ヘイトスピーチ以外の何もありません。その根底には被害者の人権を無視し、「美しい国、日本」などと言って、日本という国とその歴史を美化し、絶対視する、国家主義、歴史修正主義、靖国思想があります。そして、原発、沖縄の米軍基地、安保法制、格差社会などの問題についても、安倍政権は被害者や当事者の思いよりも、独りよがり自己陶酔的な国家観による「国益」を優先させて、戦争国家へと向かう政策に突き進んでいます。



- ・創刊1997年、800部、A5判、250頁前後、不定期発行
- ・表紙カラー、本文モノクロ
- ・1500円+税/冊
- ・問合せ: tel・fax:042-559-6941
- E-mail:sensotosei@nifty.com
- ・当資料館所蔵: 19-31号

次号(32号)の特集は「日本軍『慰安婦』問題と安倍政権打倒の闘い」。安倍政権に対する闘いは、私たちの人権、すなわち、生きる上での尊厳を取り戻す闘いです。すべての怒りを安倍政権へ! そんな思いで、今、編集作業を進めています。(谷口和憲)▽31号内容: 特集「個」を生きるー反戦・反差別・反原発という「希望」、安倍・橋下の「慰安婦」公娼論の欺瞞を暴く、いま福島原発はどうなっているのか、脱原発・脱買春の論理、ほか連載多数

記憶と記録の場をめぐる旅④

産業・教育資料室 きねがわ

―学校のあゆみと地域の暮らし

宿願だった「産業・教育資料室 きねがわ」の訪問が、ようやくかなった。

墨田区東墨田にある同資料室を知ったのは、今から3年前にさかのぼる。ぼくが、聞き書きをさせていただいていた昭島市在住の在日朝鮮人一世、朴東洙(パク・トンス)さんから、渡日後に暮らしていたのが「向島区木下川」と教えられ、にわか木下川という地名とその歴史に興味があった。そもそも、木下川を「きねがわ」と読むことさえ知らず、インターネットの検索で見つけた「産業・教育資料室 きねがわ」をまずは訪ねてみよう、と思いついたのである。

◇地域の暮らしを伝えたい

京成押上線八広駅から歩くこと8分、現在はボランティアで資料室を支えている岩田明夫さんが、東墨田会館で待っていてくださった。まずは、開室のいきさつや、その後の運営状況、さらに昨年のリニューアルなどについて



うかがい、その後岩田さんの案内で、展示スペースをゆっくり観てまわった。

開室のきっかけは、地域の暮らしの中心だった木下川小学校が、2003年に学校統廃合のあたりをうけて廃校となったことだ。1937年に開校した木下川尋常小学校以来の学校の歩みと、地域の暮らし(木下川の風土と地場産業としての皮革業)を伝えてゆくための場をつくろうと、岩田さんたち元教員が働きかけたことで、地域の住人や区の職員の理解と協力が得られ、空き教室に「産業・教育資料室 きねがわ」を開室できたそう。そのつ

よい思いは、資料室が旧木下川小学校から、隣接する東墨田会館に移転し、リニューアルされた今も脈々と息づいており、展示は、①木下川のまちの歴史、②木下川の産業―皮革・油脂、③学校の歴史、教育実践、革を使った子どもたちの作品、という三つのコーナーで構成されていた。

◇皮革産業がまちの中心

荒川の河口から10kmと離れていない木下川辺りは、江戸期までは荒川の氾濫原の低湿地が広がっていた。その後の河川改修と明治政府による都市政策や殖産政策により、皮革産業の町が形成されるのが20世紀初頭頃のように。その後東京の中心部の肥大化にともない、木下川の皮革業者を再移転させる計画が1920年代半ばから40年代にかけて、たびたび持ち上がる。そのつど皮革業者や住民の抗議で、それを阻止してきたいきさつがあるが、そうしたさなかに開校した木下川尋常小学校には、わが町の学校として特別な思いが込められている、と岩田さんは話す。

◇資料・写真、機械や道具、映像も

「産業・教育資料室 きねがわ」の展示スペースは、現在は墨

田区の東墨田会館の一面にあるので、広くはないが、床や壁、さらに展示ケースなどに、ところ狭しとたくさん資料や写真が配置されている。皮革工場にあった機械や道具類、製型であるなめし革など、大型の展示物には迫力がある。ここでしか見ることが出来ない映像資料もある。

開室時の趣旨には「収集・保存・整理・展示」をおこなうとあり、当初は東京学芸大学の教員や学生らと協力してとりくめたが、現在は予算がなくなり、新たな収集や資料整理はできなくなっている、とのこと。ぼくが渡した本誌『アーカイブ通信』に目を通され、木下川の資料室でも、せめてこういう通信をつくりたいと思っっているのですが……、とおっしゃった。

◇子どもが描く木下川

学校の歴史や教育実践をたどるコーナーで、ひとときわ目についてのが、木下川小学校の代々の生徒たちが残した文集『木下川の子ども』だ。子どもたちの目をおして、木下川の風土と歴史がいきいきと描かれている、と岩田さんが説明された文集が、すべて展示されている。内容は、わきにある文集の複写で閲覧できる。その他、「学校日誌」や「開校記念誌」、



木下川小学校発行『木下川の子ども』(HPから)

「PTA記録」などの冊子もあり、手にとり頁をくりたい衝動にかられる。

この次は、木下川を訪ねるきっかけとなったお話を聴かせてくださった朴東洙さんに声をかけて、「産業・教育資料室 きねがわ」を再訪しようと思う。皆さんも「人権」を正面からとりあげた貴重な施設でもあるこの資料室を、ぜひ一度お訪ねください。(杉山弘)

産業・教育資料室 きねがわ

- ・開館日：月～火、木～土曜日
- ・休館日：水・日曜日、休日
- ・開館時間：10:00-18:00
- ・住所：東京都墨田区東墨田 2-12-9 東墨田会館内 ・入館料：無料
- ・tel：03-3617-9004
- ・E-Mail：kinegawa@gmail.com
- ・http://kinegawa.web.fc2.com/home.html

アーカイブ多摩 目録

◆春は駆け足で

隣接する緑地保全地の中心に大きな白いコブシの木があり、冬の間から少しずつ花の実を膨らませ、ある日一斉に花を開かせる。1週間すると、今度は一斉に花を落とす。このわずかな間に市民アーカイブ多摩を訪れた人はとつてもラッキー。年々春が短くなり、夏がくるのが早くなっていくように感じますが、緑に囲まれ、うっそうとした当館も魅力的です。

◆明星大学1年生来館

多摩モノレール1本で市民アーカイブ多摩まで来ることが出来る明星大学社会学部の1年生12人が早朝から訪問。当会の紹介や成りたちに加え、ミニコミとは何か？という話に熱心に耳を傾けてくれた。その後、



実際に資料を手に取り、自分のお気に入りになりそうなミニコミを探してもらった。それぞれの関心ごとを聞きながら、ミニコミを紹介していく。授業時間終了後も残って、熱心に読み続ける学生さんあり。新たな「価値観」に出会えたでしょうか。

◆電磁波関連資料

携帯電話が普及するずっと前から電磁波問題に取り組み、各地の電波塔などの建設反対運動等の中心的存在であるガウスネットワークさんから、引越越しに伴い資料の一部寄贈あり。整理ボランティア募集中。

◆新パンフレット完成

A4判の利用案内パンフレットを新しく作成しました。お店や図書館など、置いてくれそうな場所がありましたら、まとめてお送りしますので、事務局までお知らせください。

ご意見・メッセージ等

- ・各地域の小さなアーカイブ活動に、ノウハウを提供していただけたら嬉しい。
- ・この運動をもっと広く、市民や図書館職員の間知らせていく必要を感じます。
- ・「アーカイブ通信」を毎号楽しみにしています。
- ・機会をみつめて、是非学生を見学させてください。
- ・いつも資料を送っていただき、ありがとうございます。ご活躍を期待しています。
- ・運営委員・事務局の皆さんのご努力には頭がさがります。がんばってください。
- ・緑蔭トークは魅力的です。
- ・お互い、がんばりましょう！

カンパありがとう

荒井敏行、井筒雅子、空木茜、大門正克、鈴木美和子、中山義博、馬場俊明、浜田鶴子、中村元、町村敬志、松嶋光子、山口源治郎、山口ゆみ、和田安里子、匿名4人
(2015.2.5、敬称略)

運営委員会など

2月20日 第11回運営委員会。参加者7人。(検討事項：法政大学大原社会問題研究所との寄贈契約、定期総会準備、1周年集会、新年度運営委員、資料寄贈申出他)
3月20日 第12回運営委員会。参加者6人。(会員数確認、寄贈契約書文面確認、市民アの固定資産税、定期総会議案書、HP拡充、開館当番の増員他)
4月17日 15年度第1回運営委員会。参加者6人。(大学からの見学等の対応、資料寄贈の申出、総会役割分担、15年度活動計画、新パンフレット他)
5月15日 第2回運営委員会。参加者5人。(総会・講演会最終打合せ、会員数・委任状数確認、開館当番分担、研修の必要性について他)

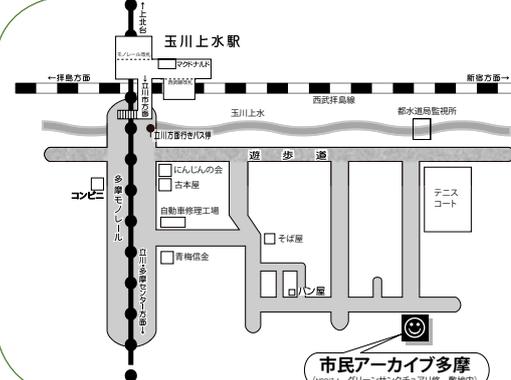
5月24日 2015年度定期総会、1周年記念講演会開催。参加者29人。

会員数 (2015.6)
・114人(正会員57、賛助会員57)

◆新規入会ありがとう (敬称略)
・正会員 新井勝紘、久保田ひろみ、高木恒一、馬場俊明、村田光男
・賛助会員 柴田隆行、西山正子

編集後記

去る5月24日に1周年の総会と開館1周年記念講演を無事、行うことが出来ました。しかしながら運営基盤が整ったとは言えず、まだまだ綱渡りなところも多々あります。会員拡大等、皆様のご協力をお願いいたします。(増・江・湯)



市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(お盆休み・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：13時～16時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7 (多摩モノレール、西武線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・電話& fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降の市民活動団体や個人が発行しているミニコミ(通信や会報など)1200タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp